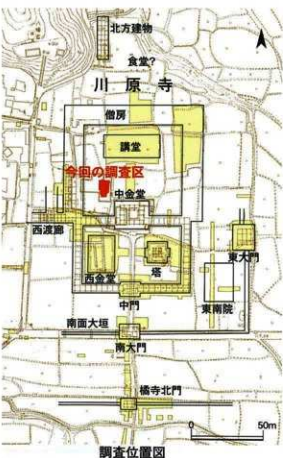


# 川原寺の

## 調査

奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部



川原寺<sup>かわはらでら</sup>は持統・文武朝（7世紀末～8世紀初）には、国の四大寺の一つに挙げられた格の高い寺院でした。昭和32～34年に奈良国立文化財研究所がおこなった調査で、1塔<sup>こたけ</sup>2金堂形式の特異な伽藍配置<sup>がらんちがい</sup>が明らかになり、復原模型もつくられました。今回の調査区までは発掘が及んでいませんでした。

今回の調査 発掘区は中金堂の北西にある光福寺の境内で、庫裏の建て替えにともなう事前調査です。復原模型ではお経を収蔵する経楼<sup>きやうろう</sup>、もしくは梵鐘<sup>ぼんしやう</sup>を吊る鐘楼<sup>かねろう</sup>という2階建ての瓦葺<sup>かわらかき</sup>建物を想定していました。

発見した遺構 調査区西北に花崗岩製の巨大な礎石<sup>いし</sup>がコ字形に6個並びます。礎石の間隔は2.1m（7尺）ほど。上面は平滑で柱の立つ位置に径1mの円形造り出しがあります。これらは建物の東半分、全体では南北3間（6.3m）×東西2間（4.2m）の南北棟建物と考えられます。また礎石列の南東では、礎石心から2.7m（9尺）の位置に、逆L字形につながる凝灰岩<sup>ぎやうがいがん</sup>列があり、この建物の基壇縁とみられます。基壇の規模は南北11.7m（39尺）×東西9.6m（33尺）に復原できます。

まとめ 川原寺創建期の経楼もしくは鐘楼の遺構を検出しました。経楼や鐘楼の発掘例は全国的にも少なく、7世紀にさかのぼる貴重な遺構です。礎石が大きいわりに間隔は狭く、また礎石から基壇の出（屋根の出）が大きいなど、やや特異な建物ですが、2階建てで入母屋造<sup>いりもやづくり</sup>の建物だったと思われれます。



昭和46年製作の伽藍復原模型（中金堂背後に経楼と鐘楼が相對します）



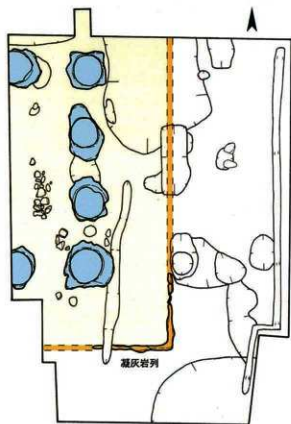
北からみた建物全景（礎石の巨大さがわかります）



東からみた東南隅の礎石（円形造り出しがわかります）



南からみた建物全景（凝灰岩の基壇縁がみえます）



発掘調査遺構図



建物の想像図